

遠藤周作著「ファーストレディ(上)(下)」新潮文庫、新潮社 1988年8月刊を読む

「でも政権交代と言ったって同じ保守派にボールが移っただけの話でしょ」

と愛子は不満そうに言った。

「そりゃそうだが、強いて言えば官僚派中心の権力を党人政治家たちが奪ったと言えるねえ」

「静一さんはあまり政治に関心ないんじゃないの」

「まあね。それはぼくがどちらかと言えば渋谷とちがって今の保守党についていけないせいかもしれない」

「じゃ社会主義に賛成するほう？」

「そうではない。愛ちゃん、ぼくはね、抑留されて社会主義国の実体をこの肌^{はだ}で感じてきた男だからね。あの国々の美しいスローガンや正義の文字には素直に酔えないところがあるんだ。ぼくは保守党についていけないのは、ひとつには日本の保守党が今後の政権交代でもわかるように官僚と党人や各派閥の勢力争いに終始しているのがイヤだからだよ。それにぼくはいくつかの欠点はあったが吉田茂は日本をここまで復興させた立派な政治家だと尊敬している」

「じゃ静一さんは革新派ではなく、保守主義には共鳴するけれど現在の保守党ではイヤと言うわけね」

静一は愛子と話をしているとやはり戦後の女性だと思う。

こうしてお茶漬け屋で食事をしながらも、男とおなじように彼女は政治にも何にでも関心を持っている。彼女のこの知的好奇心の強さが静一は何より好きだった。

「ぼくはね」

辻は男の友人と話をする時のように真剣に説明をした。

「日本の保守党が我々の国をどの方向に向けていくかという点で、不満なんだ。日本の保守派の政治家たちはね、日本人の幸福は物質的生活の安定と経済的繁栄とだけによって成りたつと考えすぎている。つまり彼等もまた共産主義者と同じように一種の唯物主義者^{ゆいぶつ}なんだよ。保守派の政治家たちの脂ぎった顔をみてみたまえ。あの顔のなかに、たとえば精神的なことや芸術を心から尊敬するものがあるだろうか」

「……………」

「あの保守政治家のなかには外国の政治家がそうであるように、古典を語れる人がいるだろうか。漱石や鷗外の文学を愛する人がいるだろうか。三好達治という名を聞いた時、日本の誇る詩人^{あぶら}だと言い、その詩を暗誦^{あんしょう}できる人がいるだろうか」

「……………」

「もちろん、政治は芸術や宗教じゃない。しかしあの人たちにぼくや君の愛するモーツァルトやマーラーの曲が人類にとってどんなにかけがえのない大事な財産だったかを、心からわかってくれる人がいるだろうか。いや、今の保守派の政治家にはいる筈^{はず}はない」

「……………」

「別に漱石やモーツァルトだけでなくでもいいんだ。大事なことは人間の幸福は物質的繁栄だけでは

なく、そんな繁栄のほかにもうひとつ、大事な、大切なものがあるという考えを彼等がせせら笑っている点にあるのだ。彼等は、ただ国が富めばいい、ただ経済だけが豊かになればいい、そのみが政治の目標だと考えている……」

食事をするのも忘れて急に夢中になって憤慨しはじめた辻静一の横顔を見つめながら愛子は可愛いと思った。

(まるで高校生のようだ)

本当にそういう時の辻はまだ無垢な高校生のような横顔をみせる。

「前からそう考えていらっしやっただの」

「いや、この気持ちを深くしたのはむしろ抑留されていたシベリアでだよ」

愛子はこれまでも時折、辻からシベリアの収容所の話をぽつりぽつり聞いたことがある

最初の収容所での労働は森林の伐採だった。物音ひとつしない山の中でトド松を黙々として一日中、伐った話もきいた。食糧の貧しかった時は稗ひえや唐えんばくもろこしや燕麦など馬の食べものまで食べたことも耳にした。

はじめて見たシベリアの春のめくるめくような美しさも辻は少しずつしゃべった。

「でも住めば都でね、物が足りなくても皆はそれぞれに智慧ちえを出しあって将棋盤や碁盤を作ったり、尺八や横笛さえ作るんだよ。その時ぼくは人間とはパンだけで生きるものではないとつくづく感じたよ。もっとも実にイヤしい連中もいたけれどね」

「イヤしい？」

「我々は収容所でソビエト人に迎合せねば生きのびられないから仕方がなかったが、なかには同じ日本人を反動だと言って告げ口したり、自己批判といってつるしあげたりする自称民主主義というグループがいてね、その連中は日本に戻る船のなかでは手のひらを返したように、自分たちが苛めた連中の機嫌きげんをとったんだよ」

「腹がたった？」

「いや、哀かなしかった……」

辻は眼をつむった。

「人間のなかにはこういう要素があるんだね。それはあの連中だけではなく、ぼくのなかにもあるかもしれない。さいわいシベリアでは、ぼくは何とかそんな自分を見ないですんだけれどね」

この言葉はその後も愛子の記憶に残った。

P176 ~ 180

<コメント>

作家、遠藤周作の作品の中ではめずらしい現代政治を題材とした秀作。政治家に期待するものは何か、政治家の条件を反面教師的に描いた作品として参考になります。上下2巻ですが、一気に読めて清涼感が残りました。是非、御一読を。

2023年5月21日(日)林明夫